

# 寺報 得源寺



第 3 号

発行 = 真宗

大谷派得源寺

住職大橋友啓

☎0767-68-2096

## 心躍った二日間!!

住職 大橋友啓

一〇月を迎えて、拙寺を含めてお仲間寺院一〇ヶ寺の報恩講が勤まる季節になりました。

一〇月二五・二六日「オトリコッサマ」と呼ばれていた拙寺の報恩講が近づくと、小学生の頃の私は、何やらワクワクしたものである。

報恩講の一週間ほど前の夜に、仕事帰りの若者たちが仏具磨きにお寺に集まって来る。作業をしながらする若者同士の会話を聞くのが楽しかった。

本堂では、若者たちの磨いた仏具に花を立てる準備が始まり、間成寺の先代さんや親戚寺院の方々のお手伝いで本堂の荘厳が次々と整えられて行く。何やら楽しそうな会話をしながら作業をこなして行くその姿も嫌いで

はなかった。

近所の松本さんの前で茶碗屋と呼ばれる陶器を売る業者のテントが設営されると、一気に報恩講開催への機運が高まる。

「ドボドボノォガチャガチャノォ」と茶碗を売るだみ声の□上や、あまり手に入れたという記憶はないけれど、水を入れて吹くとウグイスの声が出る水笛の音が懐かしい。

報恩講当日の朝学校に行くときに必ず平場の豆腐屋さんが配達に来ていた。帰ってくると本堂には幕が張られ、向拝の左の柱を背に縁の下から引っ張り出したリング箱に戸板を乗せて色とりどりの腰紐を並べて売っているおばちゃんがあった。登町の笹川さんの手作り饅頭の出張販売も懐かしい。

庫裏に入ると、いつもの場所にいつものおじさんがいつものお齋の接待を受けながらいつものお酒を呼ばれていた。

勝手(厨房)には、いつもの賄さんたちが大きなお鍋に僧侶の夕食や声明会のお齋を賑やかに作っていた。

こんな人たちの中をうろろと歩いて回るの嫌いでなかった。子どもことなど誰も構っている閑などないといった雰囲気強い時代だったが、誰も「あっち行け」と子どもを邪険にするようなことがなかったことは何よりも当時の私にとって有難いことだった。といっても、ご住職方の集まる御堂座敷に近づくとのはもつと後になる。

農作業が終わり、学校祭や町の産業祭が一〇月二五日の前後に毎年開催されていたこともあり拙寺には多くの参詣があった。

夢のような二日間は、私の楽しい思い出として脳裏に焼き付いているが、いつの間にか六〇年の歳月が流れ、参詣の数も心も痩せ細ってしまった。

真宗大谷派というのは『報恩講教団』と言われるように、来る年も来る年も親鸞聖人そして報恩講が大好きな教団なのである。さあ、だれかれ言わず報恩講に出掛けよう。

### 総代会を開催

(九月二三日 秋分の日)

住職から本年度(二〇一九年七月から二〇年六月)の東本願寺から拙寺への御依頼金などの金額の報告があった後、当宗派で二〇二三年にお迎えする「宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃事業」の拙寺分御依頼懇志金一七一、〇〇〇円(本年度から四年間)を門徒数で均等割り一門徒当たり四千元を各家庭の報恩講の際に千円ずつ四年間に渡って収納頂くことになりました。ご門徒の皆様のご協力をお願い申し上げます。

また、昨今の社会情勢を鑑み得源寺境内に共同の納骨施設を建てる方向で住職を中心に検討を始めることにいたしました。

以上報告一件、審議一件、承認一件を全員ご出席いただきて協議賜りました。

# お知らせ!!

(二〇一九年一〇月〜二〇年一月)

## 「おとりこじさま」?

東本願寺から百里以内の大谷派の寺院は、一月二八日の親鸞聖人の御命日を「縁にして勤まる『御正忌報恩講』の前」、各寺で日程を引上げて報恩講を勤めてから東本願寺の御正忌報恩講にお参り下さい。というお触れがあつてから、引上会(いんじょうえ)とか御取越(おとりこじ)と呼ばれる先取り報恩講が勤められるようになったと言われています。

能登半島では、百里(四〇〇

km)はちょうど田鶴浜辺りなので、田鶴浜以北の真宗寺院で「引上会」は行われていません。

とき 一〇月二五日(金)〜二六日(土)  
午後二時 お始まり

ところ 得源寺  
持ち物 念珠・蠟燭代・費銭等

## 御正忌報恩講

(こしょうきほうおんこう)

本来、引上会を勤めてあるのであれば、本山にお参りする筈ですが、拙寺では引上会に門徒さんにお齋を頂いて貰う時間がないので、御正忌報恩講に「門徒呼び」と称してお齋の席に着いていただいています。

とき 一月二八日(木)

正午からお齋(とき) 午後一時 お勤め

ところ 得源寺  
一時半 住職法話

## 除夜の鐘

とき 一月二二日 大晦日

午後一時頃から突き始めます。

※ごなたでも参加できます。

## 修正会

(しゆつしやうえ)

とき 一月一日 元旦

早朝六時 お始まり

※法要に続いて午前中に庫裏で住職が年賀を受けています。

## 「報恩」ということ

「法蔵菩薩因位時」観見諸仏浄土因」など「正信偈」

には「因」という言葉が良く出てきます。一般的に宗教というものは、結果をたまわると思っていることがあります。

つまり「因」よりも「果」である無病息災、商売繁盛、家内安全です。でも結果としての利益は、いただいたときは感謝しますが、すぐにそれが当たり前になり次の「果」を求め、本当に満足するということがありません。

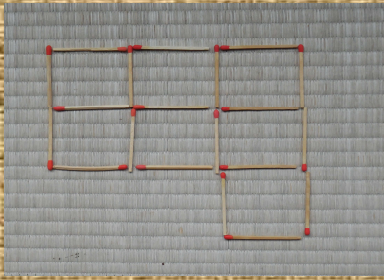
今の私が一つの結果ならば、その「因」はこの世に生を受けたことから始まったのです。そして、数えきれない良縁と悪縁によって、この身をたまわっている。というのが、今の自分です。

「因」に心を置くと「恩」という字になり、今の私をわたりたらしめてくれた恩に報(へん)感謝(かんしゃ)する(こころ)「報恩」こそ、私たち真宗の仏事の全てです。(釋友啓)

## 今号の脳トレ

今回は三本を動かして七つの正方形を五つにしてください。またも大きさは全て同じです。

※ 種明かしは次号。  
せつ「こじ」はつかめましたが、マッチ棒はこれで最後です。



## 前号の答え

